2022 年度　小学校英語教育センターシンポジウムの報告

2022 年度の小学校英語教育センターシンポジウムが 10 月 8 日㈯に開催された。今回は，小学校に続き，2021 年度より中学校学習指導要領が全面実施となり，これまで以上に小・中学校間の連携が求められる背景のもと，「小学校外国語教育のこれからを考える―様々な立場から―」というテーマを掲げ，文部科学省初等中等教育局視学官（鳴門教育大学客員教授）直山木綿子先生をはじめ，様々な立場で取組を進めておられる先生方にご登壇いただき，これからの外国語教育について，参加者とともに考えることを主旨とした。当日はシンポジウムの模様を動画配信し，県内外の学校教員，教育関係者及び学生など，合計 169 名の参加者（会場参加者 49 名，オンライン参加者 120 名）があった。以下にシンポジウムの内容を報告する。

まず，基調講演として，直山木綿子先生に，「教育×小学校教育×外国語教育―不確実性の高い社会の中で問われる外国語教育の在り方―」と題しお話いただいた。直山先生は，外国語教育の「小中連携」を主題に，各種データをもとに，その現状，成果と課題についてお話された。両校種の外国語（英語）教育の共通点として，特に「言語活動」を取り上げ，言語活動を行う際のポイントについて，実践事例をもとに示された。また，CAN-DO リスト形式による到達目標をもとに両校種の相違点を理解する必要性を説かれ，それぞれの校種における文法や語彙，読み書きの扱われ方とともに，中学校での言語活動の高度化などについて言及された。

基調講演に続き，徳島県教育委員会指導主事（小学校担当）の寺田美喜先生，同教育委員会指導主事（中学校担当）の武知一誠先生，徳島県小学校教育研究会外国語部会会長の竹中章公先生，そして，本学附属小学校教諭の岡朋哉先生より，それぞれの立場から，「学校教育の中で外国語教育に求められる役割―現状と課題―」をテーマにお話をいただいた。まず，寺田先生は，児童が英語を使ってコミュニケーションしたいと思えるような外国語の授業をするためにも，目的・場面・状況に応じて子どもたち自らが英語を選んで使うような言語活動の必要性について述べられた。一方で「言語活動を通して指導すること」に関する理解が教師により異なるため，繰り返し伝えていく必要性を指摘された。次に，武知先生が，「いつか，どこかで」の英語教育ではなく，「今，ここで」の英語教育へシフトすべきこと，そのためには，教室内でのコミュニケーションの面白さに着目した英語教育を展開し，他者や自己との関わりを大切にすべきことを説かれた。そして，徳島県教育委員会が推進する 3 つの取組（考えや気持ちを伝え合う授業，小・中・高でつながる指導と評価，コミュニケーションのためのツールとしての英語）について示された。竹中先生は，外国語教育はコミュニケーション能力を育成し，予測不可能な時代において多様な他者と協働して創造性を発揮し，新たな価値を生み出す，国際社会で活躍する人材を育成する役割を担っていることを述べられた。そのためにも，学校教育目標の重点事項に外国語教育を位置づけた教育課程の編成，教員の負担軽減を図った研修等を通じた教員の指導力の向上，地域人材の活用を含めた社会との関係性の中で外国語を学べるような環境構築の必要性を強調された。そして，岡先生は，学習指導要領が求める資質・能力の育成の中で，外国語教育では，特に，自他への理解を深め，違いを認め尊重し合う態度の育成が促され，ご自身もそのことを重視して授業を行っていると述べられた。そして，児童の姿（興味・

関心や学習状況）の適切な把握にもとづく授業づくりの重要性とともに，専科や学級担任それぞれの立場における課題とその解決の方向性について示された。

続くパネルディスカッションでは，直山先生による司会のもと，専科教員との連携，読み書きの指導法，スローラーナーへの対応，管理職の役割などに関するフロアからの質問を中心に，上記４名の登壇者との活発な意見交換が行われた。まとめとして，不確かな世の中において言葉を使って物事を解決するという，言葉のもつ役割や大切さを，外国語教育だからこそ改めて認識させることができることを確認し，パネルディスカッションが締めくくられた。

このたびのシンポジウムを通して，小中連携の視点から外国語教育の役割，学習指導要領に示された目的や内容を再確認・共有し，実践の具体的なあり方を改めて考える有意義な機会となった。最後に，ご登壇された先生方，会場あるいはオンラインで参加いただいた皆さまに，この場をお借りし，心より感謝申し上げたい。ありがとうございました。

（小学校英語教育センター　山森　直人）